

(2) キャリア・カウンセリングと自己理解

児童生徒にとって、キャリア・カウンセリングは、自分に関する情報と進路に関して持っている情報とを接近させる機会である。児童生徒は進路情報を参考にしながら、自己理解を促進する。

進路情報は、インターネットや適性検査結果などからだけでなく、教職員や保護者、地域の人々など、人からも得ることができる。児童生徒の自己理解は、これらを効果的に組み合わせることで深めていくことができる。

(3) キャリア・カウンセリングの特徴

ア 教職員と児童生徒の日常の人間関係がベースになる

キャリア・カウンセリングは、教職員と児童生徒との好ましい人間関係の中で進められてこそ効果が上がる。そのため、学校生活の中の継続した人間関係を基盤としてカウンセリングの関係を築いていくことが重要である。

イ 児童生徒が自己開示できる場にする

児童生徒が教職員を「評価者」として意識すると十分な自己開示は行われず。教職員は、学級活動・ホームルーム活動などを通して、児童生徒が自分を表現する機会を活性化し、教室が安心して自分を開示できる場にする。

ウ 教職員間の情報ネットワークが利用できる

担任としての一面的な児童生徒理解では十分とは言えない。進路希望をはじめ、教科の学習状況、生徒指導上の情報などを含めて、児童生徒個人のトータルな情報を教職員間で共有することが重要である。そのためにも、教職員間の日常のコミュニケーションを一層活性化させる必要がある。

(4) 学校教育におけるキャリア・カウンセリングの機能

ア キャリア・カ

ウンセリングの

基本的機能

キャリア・カ

ウンセリングの

基本的機能は、

児童生徒自身の

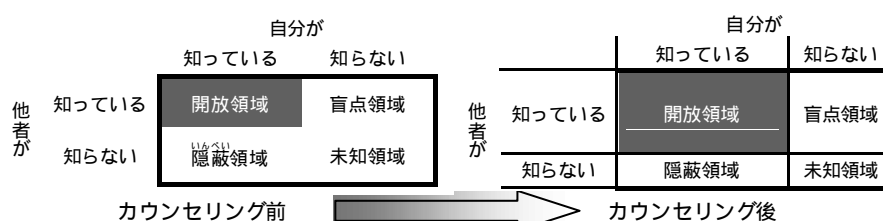


図 13 キャリア・カウンセリングの基本的機能

自己理解や教職員による児童生徒理解を深めることにある。図 13 に示したように、「自分も他者も知っている」開放領域を広げ、それ以外の 3 領域を小さくすることである。

イ 通常の相談活動としてのキャリア・カウンセリング

問題に直面した児童生徒と教職員とがコミュニケーションをとり、問題を解決していく過程こそ、カウンセリングを行う基盤となる。教職員が児童生徒と円滑にコミュニケーションがとれる関係づくりを進めるために、校内研修をはじめ、様々な研修の機会を活用し、カウンセリング技術の向上に努める必要がある。

ウ 定期キャリア・カウンセリング

年間計画に組み込まれている相談を基本としながら、「児童生徒とのコミュニケーションのきっかけ」ととらえ、その後も積極的・継続的に相談の機会を設定していくことが大切である。

【定期キャリア・カウンセリングの留意事項】

「相談することがないのになぜ相談するのか」という疑問を児童生徒が感じるなど、定期的に相談を行うことの難しさを理解しておく。

児童生徒の記録や行動をチェックし、事前準備をしておく。

学校、家庭、友人などに関する情報を集め、効果を上げる工夫をする。

ペースや話の方向を合わせるなど、カウンセリングの基本的技能を身に付けておく。

定期キャリア・カウンセリングは人間関係づくりのスタートであることを自覚しておく。

エ 保護者とのキャリア・カウンセリング

児童生徒理解を深めるには、家庭環境の理解は不可欠であり、保護者面談や三者面談を効果的に活用する。

次の点に留意し、児童生徒、保護者、教職員の円滑な意思疎通を図ることが重要である。

保護者面談は、児童生徒にも知らせた上で実施する。

児童生徒との二者面談後は必要に応じて家庭での話し合いをもたせ、その内容や結果については、保護者から簡単に報告してもらう。

三者面談前には児童生徒や保護者の考えや希望が把握できるように、簡単な事前調査を実施しておく。

進路の問題にかかわる生徒指導上の問題が懸念される場合は、保護者に来校してもらって情報交換をする。

学年、学級PTAなどの機会を有効に活用する。

(5) 自己理解を促す教職員の支援

キャリア・カウンセリングを進める上で重要なことは、児童生徒の発達段階に応じて、個の発達を支援することである。教職員に求められているのは、児童生徒がこれらの課題の達成を通して、将来、社会人・職業人として自立していくための能力や態度を身に付けさせることである。

次に、児童生徒に自己理解を促す支援のポイントを示す。

「欲求と動機」からアプローチする

自分は何をしたいのか、どう在りたいのか、それはなぜなのかを考えさせることは、生き方（在り方）についての意識化を図ることでもある。

「興味・関心」等からアプローチする

自分は何に興味・関心があるのか、何が好きなのかを考えさせることは、職業への興味・関心をもたせることでもある。

「能力・特性」等からアプローチする

自分は何ができるのか、自己特性はどこにあるのかなどを考えさせることは、自分の可能性に気付かせることでもある。

「価値観」からアプローチする

自分は何を大切にしながら働きたいのか、生きていきたいのかを考えさせることは、職業観や人生観をはぐくむことでもある。

「役割・責任・期待」からアプローチする

自分は周囲から何を期待されているのか、果たすべき役割は何かを考えさせることは、生き方への自覚と責任を促すことでもある。

「行動計画」からアプローチする

自分は「何をすべきか、どのように行動すべきか」などを考えさせることは、目標達成のための進路計画を考えることでもある。